

使徒の働き12章 「陰府の門も勝てない教会」

1A ヘロデの迫害 1-4

2A 祈りに応えられる主 5-19

1B 熱心な祈り 5

2B 御使いによる救い 6-11

3B 不信仰な祈り 12-17

4B 面子の潰されたヘロデ 18-19

3A ヘロデへの裁き 20-23

4A 妨げられない御業 24-25

本文

使徒の働き 12 章を見ていきます。前回は、アンティオケに教会が生まれ、そこでバルナバとサウル(後のパウロ)が教えていったところを見ました。エルサレムから預言者たちがアンティオケに来て、そのうちの一人アガポが、世界中に大飢饉が来ると預言して、それでアンティオケの教会は、ユダヤにいる兄弟たちに救援物資を送ることに決めます。その物資を、バルナバとサウロに託しました。ペテロは、カイサリアから既にエルサレムに戻っており、コルネリウスの一家の回心を伝えて、異邦人にも救いがあることをユダヤの兄弟たちも知って、神をあがめていました。そのような、異邦人とユダヤ人がキリストにあって交わりが始まった矢先の出来事になります。

1A ヘロデの迫害 1-4

¹ そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人たちを苦しめようとしてその手を伸ばし、² ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。³ それがユダヤ人に喜ばれたのを見て、さらにペテロも捕らえにかかった。それは、種なしパンの祭りの時期であった。⁴ ヘロデはペテロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。過越の祭りの後に、彼を民衆の前に引き出すつもりでいたのである。

ここの「ヘロデ王」は、ヘロデ・アグリッパ一世のことです。新約聖書には、ヘロデ王と言っても、同じ人物ではないので、誰なのかを知っていく必要があります。イエス様が生まれて、東方の博士たちがエルサレムを謁見した時のヘロデは、ヘロデ大王です。ローマから任されてユダヤ人を治める王として君臨し始めました。そして、ヘロデ大王がユダヤ人の血筋を持つマリムネー世という、ハスモン朝の王女と結婚していました。彼女との間に、アリストブロスという息子が生まれました。後に、ハスモン朝との関係があつてはいけないと思ったヘロデ大王は、自分の妻と息子を殺してしまいます。けれども、その息子、アリストブロスは既に結婚しており、ヘロデ・アグリッパ一世を

生んでいたのです。そして、イエス様が公生涯を送られていた時のヘロデは、ヘロデ・アンティパスです。

このヘロデ・アグリッパ一世ですが、どうして教会の人たちを苦しめ始めたのでしょうか？「ユダヤ人に喜ばれた」とあります。彼の政治生涯は、ユダヤ人に気に入られようとしたものだったようです。金遣いの荒さで有名で、ローマでその返済に困っていたアグリッパ一世は、後に皇帝になるカリグラと交友の仲になり、それでイスラエルの地に戻って王の肩書きが与えられました。自身にもユダヤ人の血は流れているし、ユダヤ人と仲良くするために、律法や慣習を守っていました。そこで、彼らが、エルサレムの教会に反対していることを知って、それでその指導者に手を伸ばしたということです。

指導者として、「ヨハネの兄弟ヤコブ」を殺しました。ヤコブについては、十二使徒で他にも「アルパヨの子ヤコブ」がいますが、同名なので、「ヨハネの兄弟ヤコブ」とルカは書いていると思われます。イエス様が近くに引き寄せた三人の弟子のうちの一です。ペテロ、ヨハネ、そしてヤコブです。興味深いことに、ヤコブが十二使徒の中で初めての殉教者となりましたが、肉の弟でもあるヨハネは、殺されそうになるも奇跡的に生きて、唯一、殉教せず生き残った使徒です。

午前礼拝で話しましたが、どうして、ある人を早く死なせ、また別の人はそうでないのか？という問いに対しては、「主の定められた時があり、残された人々には使命がある。」ということでしょう。早く死ぬ人が不幸で、長く生きることが幸せだというのは、きわめて人間的な見方です。地上のことしか考えていません。そうではなく、命ははかないものであり、永遠に比べたら、本当に五十歩百歩です。キリスト者にとっては天こそが故郷であり、主と共にいることこそが最高の幸せであります。長く生きているということは、得をしたわけでもなく、むしろ主のために生きる使命が与えられている、ということです。私たちは天に召されるという召命を受けており、その召命から始まって、今、地上で主に仕えているのです。

ヤコブを殺したらユダヤ人に喜ばれたので、まさに代表的な教会の指導者であるペテロにヘロデは手を出します。ここで、「種なしパンの祭りの時期」であったとあります。さらに、「過越の祭りの後に、彼を民衆の前に引き出す」ともあります。ユダヤ人が、過越の祭りの時にイエス様を十字架に付けたことを思い出してください。民族的に熱狂する時であり、熱狂に乗じて、ヘロデはこのパフォーマンスをやっているのでしょう。過越の祭りがあって、その後に七日間、種なしパンの祭りがあります。それを一括りして、すべてを種なしパンの祭りとも言うし、過越の祭りとも呼んだりします。祭りの時は、本来、人を死刑にするのはやってはいけないことです。（イエス様を殺したユダヤ人指導者たちも、過越の祭りの時は避けようとしていましたが、そうになってしまいました。神のご計画があったからです。）それで、祭りが終わってから殺すつもりでいました。

そして、「四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた」と言っていますが、合計 16 名です。一日を四つに、つまり 6 時間ずつに分けて、一組四人が監視していくことになります。すごい人数ですが、それもそのはず、以前、使徒たちを牢に入れた時に、主の使いが夜に牢の戸を開けて、彼らを連れ出したことがあるからです。牢にいないからどうしたものかと思っていたら、なんと、宮の中に立って人々に教えていたのです！(5:17-26)こんなことがありましたから、厳重な監視が必要だと思ったのでしょう。

2A 祈りに応えられる主 5-19

1B 熱心な祈り 5

⁵こうしてペテロは牢に閉じ込められていたが、教会は彼のために、熱心な祈りを神にささげていた。

ここは、本当にすばらしい箇所です。ペテロは物理的に牢で閉じ込められています。けれども、教会は彼のために、熱心な祈りが捧げられています。祈りは、物理的な制限や障壁に制限されることはありません。「Ⅱコリ 10:4 私たちの戦いの武器は肉のものではなく、神のために要塞を打ち倒す力があるものです。」そしてここに、「熱心な祈り」とありますね。パウロも、エペソ人への手紙で、「忍耐の限りを尽くして祈りなさい。」と言っていますし(6:18)、イエス様は不正の裁判官の喩えで、「ルカ 18:7 まして神は、昼も夜も神に叫び求めている、選ばれた者たちのためにさばきを行わないで、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。」

2B 御使いによる救い 6-11

⁶ヘロデが彼を引き出そうとしていた日の前夜、ペテロは二本の鎖につながれて、二人の兵士の間で眠っていた。戸口では番兵たちが牢を監視していた。

ここはある注解によると、神殿の敷地の北に隣接する、アントニオ要塞ではなかったのか？とされています。引き出そうとしていた前夜ということですから。本当にぎりぎりの時ですね、それまで主が介入されなかったのですが、これもまた信仰と忍耐が必要とされます。けれども、ペテロは、「二人の兵士の間で眠っていた」とあります。眠っていました。彼は、主に任せている中で平安になっていて、それで眠ることができているのでしょう。

⁷すると見よ。主の使いがそばに立ち、牢の中を光が照らした。御使いはペテロの脇腹を突いて彼を起し、「急いで立ち上がりなさい」と言った。すると、鎖が彼の手から外れ落ちた。⁸御使いは彼に言った。「帯を締めて、履き物をはきなさい。」ペテロがそのとおりにすると、御使いはまた言った。「上着を着て、私について来なさい。」

御使いは、一つ一つ、短い指示を与えています。急いで立ち上がりなさい、帯を締めて履き物をはきなさい、そして、上着を着て、ついて来なさいと。今の服にはないのが、「帯を締める」ですが、一

枚の布で着物が作られていて、大きな運動をする時は、足まで垂れている部分を帯で締めて足が動かしやすいようにします。

⁹ そこでペテロは外に出て、御使いについて行った。彼には御使いがしていることが現実とは思えず、幻を見ているのだと思っていた。¹⁰ 彼らが、第一、第二の衛所を通り、町に通じる鉄の門まで来ると、門がひとりでに開いた。彼らは外に出て、一つの通りを進んで行った。すると、すぐに御使いは彼から離れた。¹¹ そのとき、ペテロは我に返って言った。「今、本当のことが分かった。主が御使いを遣わして、ヘロデの手から、またユダヤの民のすべてのもくろみから、私を救い出してくださいましたのだ。」

嚴重な監視であったのが、すべてを通り越して、一つの通りのところまで行きました。そして、ようやくペテロは我に返りました。主が御使いを遣わし、ヘロデとユダヤ人から救い出して下さったのだと分かったのです。この前の、コルネリウス一家の救いもそうでしたね、主が介入された時、幻を見せられた時は分からなかったけれども、後になって分かりました。

興味深いことに、主が復活された時も、そこにはローマの番兵がいて、けれども、御使いが来て、番兵の力が無力にされて出てこられました。その復活の力がここでも働いていて、「縛られていても、解き放たれ、立ち上がることができる」という流れがあります。

3B 不信仰な祈り 12-17

¹² それが分かったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリアの家に行った。そこには多くの人々が集まって、祈っていた。

ペテロはすぐさま、教会に向かいました。教会と言っても、当時は、ここにあるように「家」です。ユダヤ人による迫害が強くなってから、なおのこと人目に隠れたところで集まっていた可能性があります。ここで、「マルコと呼ばれているヨハネの母マリアの家」とあります。ヨハネはユダヤ人の名前ですが、ギリシア語の別名もあり、それがマルコです。このマルコは、そうです、マルコによる福音書のマルコであります。彼はまだかなり若かったと思われます、マルコの福音書には、こんな逸話を書いてあります。「14:51-52 ある青年が、からだに亜麻布を一枚まとっただけでイエスについて行ったところ、人々が彼を捕らえようとした。すると、彼は亜麻布を脱ぎ捨てて、裸で逃げた。」母マリアは、この家が大勢の人が集まることができるので、裕福な人の寡婦だったのでしょうか。伝承としては、最後の晩餐の席もここだったのではないかとされています。定かではありませんが、上町と呼ばれる、裕福な人たち、祭司たちが住んでいる町にあったのでしょうか。アントニオ要塞から上町へは、東から西へ向かいます。

祈りには、すぐに答えが来る場合とそうでない場合がありますが、ここではすぐに答えが来まし

た。彼らが、ペテロのために熱心に祈っている時に、まさにペテロが現れました。かつて、アブラハムのしもべが、イサクのお嫁さんのために祈っていた時に、その井戸の傍らにちょうど、リベカが水汲みに来ていました。

¹³ 彼が門の戸をたたくと、ロデという名の召使いが応対に出て来た。¹⁴ そして、ペテロの声だと分かると、喜びのあまり門を開けもせず奥に駆け込み、ペテロが門の前に立っていることを知らせた。¹⁵ 人々は彼女に「あなたは気が変になっている」と言ったが、彼女は本当だと言い張った。それで彼らは「それはペテロの御使いだ」と言った。¹⁶ だが、ペテロは門をたたき続けていた。彼らが開けると、そこにペテロがいたので非常に驚いた。

非常に興味深い反応です。ロデという女中だけが、ペテロが来たことを確信して、喜びのあまり知らせに行きました。彼女は信じていたのですが、他の人たちが、「あなたは気が変になっている」と言っています。興味深いです、だって、イエス様が復活した時もマグダラのマリアや女たちが復活したのを伝えても、やはり同じような反応だったのです。ロデが言い張るので、「それはペテロの御使いだ」と言い直しています。ユダヤ人の信仰には、それぞれを守る御使いがいると思われていました。イエス様も幼き子に、御使いがいることを言及している箇所があります(マタイ 18:10)。

つまり、彼らはきちんと信じていなくて祈っていた、ということです。ペテロを救い出してくださいと祈っているのに、実際に救い出されたら信じられないと言っているのですから滑稽ですが、私たちはしばしば、この過ちを犯してしまいますね。イエス様は弟子たちの心の鈍さを戒められましたが、私たちにも戒められます。けれども、その戒めは、嬉しさのこもった戒めであり、つまり、私たちの不信仰にもかかわらず、主は祈りを聞かれて事を行ってくださるのだということです。神の恵みの主権が働いているのです。

¹⁷ ペテロは静かにするように手で彼らを制してから、主がどのようにして自分を牢から救い出してくださったかを彼らに説明し、「このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください」と言った。そして、そこを出て、ほかの場所へ行った。

ペテロは、自分が脱獄したことで、騒動が起こることは時間の問題だということを知っていますから、静かにするように制しました。そして、どのように主が脱獄させてくださったかを説明したら、すぐに他の場所に行きました。エルサレムの町から出て行ったのでしょう。

そしてここで、「このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください」とあります。このヤコブは、イエス様の半兄弟です。イエス様は処女降誕で生まれましたが、他の弟は、父ヨセフとマリアとの間に生まれています。初めは、他の弟たちと同じように、イエス様を信じていませんでした。けれども、主が復活して、ヤコブにも現れてくださいました。「 I コリ 15:7 その後、キリストはヤコブに現れ、そ

れからすべての使徒たちに現れました。」このヤコブが、「ヤコブの手紙」を書いた本人です。ペテロがエルサレムの教会で指導者であったところが、ペテロはいろいろ巡回するようになっていた中で、エルサレムの教会を監督する人として、ヤコブが立っていたのでしょう。15章でも、エルサレムにおける会議で重要な役割を果たします。

4B 面子の潰されたヘロデ 18-19

¹⁸ 朝になると、ペテロはどうなったのかと、兵士たちの間で大変な騒ぎになった。¹⁹ ヘロデはペテロを捜したが見つからないので、番兵たちを取り調べ、彼らを処刑するように命じた。そしてユダヤからカイサリアに下って行き、そこに滞在した。

ヘロデは、番兵たちを処刑してしまいました。ローマの法律で、番兵が囚人を逃してしまうと、その課せられた罰を同じように受けるというのがありました。ペテロを殺すつもりでいたので、番兵も殺されたのです。何とも過酷であり、ヘロデの自己中心性と無慈悲さが表れています。

そして彼は、その地域の首都になっていたカイサリアに下っていき、滞在します。カイサリアは、使徒の働きに入ってから何度となく出て来るところですね。伝道者ピリポがそこに住み始めました。パウロがエルサレムからタルソに逃げる時に、そこから出る船に乗りました。そして、コルネリウスの一家はカイサリアに住んでいます。カイサリアは相当、大きな町でした。そこにヘロデが行きませんが、ヘロデの宮殿があります。海に出て行く建物で、今でもその一部が遺跡で見ることができます。きれいなモザイクも残っています。しかし、ヘロデのこれらの仕業に対する神の裁きが、このカイサリアでもたらされます。

3A ヘロデへの裁き 20-23

²⁰ さて、ヘロデはツロとシドンの人々に対してひどく腹を立てていた。そこで、その人々はそろって王を訪ね、王の侍従ブラストに取り入って和解を願い出た。彼らの地方は王の国から食糧を得ていたからである。

ヘロデは、隣国との外交問題を抱えていました。ツロとシドンは、イスラエルの北にあるフェニキアの都市国家です。かつて、イスラエルの王ソロモンは、神殿のための杉材を得るために、時の王ヒラムと契約を結びました。杉材や職人を送る代わりに、ヒラム一族の食べ物を与えてくださいとお願いしていました(Ⅰ列王 5:9)。その時から伝統がもしかしたら続いていたかもしれません。エゼキエルの時代にも、イスラエルとユダと交易をして、小麦や、きびを含んだ商品を受け取っていた様子を書いてあります(27:17)。その時、特に飢饉が起こっていました。ですから、ヘロデが制裁をかけて食糧を輸出していなかったことで切羽詰まっていた。それで侍従ブラストを味方につけて、和解しようとしていました。

²¹ 定められた日に、ヘロデは王服をまとして王座に着き、彼らに向かって演説をした。²² 集まった会衆は、「神の声だ。人間の声ではない」と叫び続けた。

ここの「定められた日」とは、紀元後 44 年、皇帝クライデオを称えるための祭りだったそうです。そこに、ツロとシドンの人たちが集まりました。祖父のヘロデ大王が建築した建物です。今でも、カイサリアには人々の集まる円形劇場などの遺跡が残っていますが、たいそう豪華なところです。

そこで、「王服を」まとしています。歴史家ヨセフスによると、銀製の王服で、朝日に照らされて見事な輝きを放っていました。そこで演説をした時、彼にへつらっていますから、ツロとシドンの人々は、「神の声だ。人間の声ではない」として叫ぶのです。ヨセフスも、「たといこれまでは陛下を人間として恐れてきたけれども、これからは不死のお方です。」と言ったと書いてあります。覚えていいますか、ペテロなど使徒たちは何度となく、自分たちに何か力があるかのように、信心深さがあるかのように見えてはいけません。イエスの御名の力によって足なえが立ち上がったのだということ。またコルネリウスがひれ伏した時も、同じ人間であるとして立ち上がらせたこと。ペテロは、神の栄光に自分が触れることがないように注意深くしていました。ところがヘロデは、そのへつらいの言葉をそのまま受け入れて行ったのです。人のお世辞やおだてを受け入れることは、非常に危険です。自分をおかしくさせます。

²³ すると、即座に主の使いがヘロデを打った。ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである。彼は虫に食われて、息絶えた。

「箴 16:18 高慢は破滅に先立ち、高ぶった霊は挫折に先立つ。」とあります。かつて、バビロンの王ネブカドネツアルが、自分の力によってこのバビロンは建てられたと誇っていた時、ちょうどその時に天の御使いが来て、彼が獣のようになると宣言し、果たしてその通りになりました。ここでも主の使いがヘロデを売っています。

「彼は虫に食われて、息絶えた。」とありますが、当時は寄生虫の巨大なのがあり、腸に穴を開けるほどのものがあつたそうです。ヨセフスがここでの出来事を詳細に記録しています。初めに、心臓に刺すような痛みを覚え、全身が痛くなり、締め付けるような痛みが胃を襲いました。それから、宮殿に運ばれ、5 日間、腹部の痛みで消耗しきった王は息絶えた、と書いてあります。（「ユダヤ古代誌」第 XIX 卷 8 章 2 節）」

4A 妨げられない御業 24-25

²⁴ 神のことばはますます盛んになり、広まっていた。

このことを通して、さらに神のことばが進んで行ったのです！使徒の働きには、いろいろな出来

事の中でさらに御言葉が広がったことをルカが記録しています。やもめへの配給のことで問題が起こったけれども、七人の執事が選ばれた後で、こうあります。「6:7 こうして、神のことはますます広まっていき、エルサレムで弟子の数が非常に増えていった。また、祭司たちが大勢、次々と信仰に入った。」そして、迫害がエルサレムで起こって、散っていき、けれども、迫害の急先鋒であったサウロが回心した後で、こんな言葉があります。「9:31 こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サムリアの全地にわたり築き上げられて平安を得た。主を恐れ、聖霊に励まされて前進し続け、信者の数が増えていった。」課題や問題があるけれども、そこで御霊に従って生きている中で、神が勝利を与えてくださっているのです。

ここでは、死に打ち勝つ教会の姿を見ることが出来ました。ヤコブの殉教がありました。その死によって教会は終わることなく、むしろ打ち勝っていったのです。イエス様が、ペテロにこう言われていました。「マタ 16:18 そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」陰府はハデス、死者の行く所です。死もそれに打ち勝つことはできないのです。

²⁵ エルサレムのための奉仕を果たしたバルナバとサウロは、マルコと呼ばれるヨハネを連れて、戻って来た。

話が 11 章の終わりに戻ります。ヤコブとペテロに対するヘロデの仕業の辺りで、バルナバとサウロがエルサレムに来ていました。救援物資を渡す奉仕を終えたのです。それで、ここから、先ほど出て来たマルコの名が登場します。バルナバとサウロがマルコを連れて行って、アンティオキアの教会まで行き、13 章、二人がその教会によって宣教のために遣わされる時に、マルコもお供することになります。マルコは、バルナバのいとこであるとパウロがコロサイ書で言っています(4:10)。そして、その第一次宣教旅行で途中で帰ってしまい、後に 15 章で第二次宣教旅行に行く際に、マルコを連れて行くと言ったバルナバにパウロが大反対して、二人が分かれてしまうという残念なことが起こります。ただ、残念なことではありますが、主がこのことをも用いてくださることも分かります。

こうやって、主は、ヤコブの死を決して無駄にされない方であることが分かりました。主ご自身が死なれたのですから、たった 30 歳そこそこで死なれたのです。もちろん、3 日目によみがえられましたが、その死が人々を救う、犠牲であったのです。私たちに起こることで、無駄なことはありません。